

027
338
1

悔過
善
心

言ふるはのし進之をそりことなり
けり夫れ一城凡且も越々茶葉
アトそりてまね悲傷斜ヤ何れ
乃せふぞ聊乃まのし二二也乃
長孫中乃源由一何れ他道の
そり子一木とそり流るる程
らるゝをれおちよとまよまの刻
なぐ追尋乃連之序とけりた

言ひて一編のし集とてそり人のり

い席乃街乃常と物との園ゆ成りん

辞よりそり方おくして終り一説乃

抑之を揚ち知れ何れと信ち

やほは進ちたれと終るはつとそり

あつて人なり乃そりし
終り

室唐三二 五編

羽州散人草川舎

素紙種序



初七日蘇乃也

此紙箱

巴里深んてなるといふも蘇乃也

可成

侍由はくく有ぬの月

愛航

難乃香も標は同人のまきり

甚慮

河の岸も、河らへん斬

草竹

知より思は浮小懐乃水音

雲点

強物も乃金丸のしり

の地

二七只車のい

願書

小車はむらたはるは流末や

憂

病いん乃はさや

雲

かきよれは吾何とのや

麦

掃く事とては捨て

可

風よはるはる

音

おれ事よはるはる

友

二七日時景

菅川

おれ物や情よはるはる

麦

夏と給へ月々

其

そら行る平よはるはる

可

小せく童ハ

雲

はるをよはるはる

音

川一

音

四七日 狂櫻乃い

曲松店

唯子丹明を流し一ヤ狂櫻乃ふ

骨竹

も係をく油盡て止む

可隆

狂胃乃流し三日いたとやう

雲志

祈くまらぬと津く合点

甚意

河長の癖をよかり一夜く又

爰記

初回く解をゆるといお

骨竹

五七日 狂櫻乃い

骨竹

亦高井中を重し難路い

雲志

海いらわくし金くあつて

爰記

水く由い昔の唐よ折折て

骨竹

言一巻い暇をよるおと

可隆

流氷い流と流すり流の月

甚意

も流すも流すも流す

骨志

六七日風仙ひ

新し掃一庭より春風吹

麦萩

秋は昔時の月より過ぎ

雲

新し掃一庭より春風吹

可成

新し掃一庭より春風吹

春

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

七七日風仙ひ

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

新し掃一庭より春風吹

暮

かきつばたの愛のついでに

古今の三経の流波の二を言ふるは

かきつばたの何れか身はしるは

想ひし世法師の宗より龍子と後

かきつばたの心は二葉の如く

かきつばたの山の花を黄泉と

同何れもかきつばたの世の

かきつばたの世の世の世の世

同何れもかきつばたの世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

かきつばたの世の世の世の世

山素くくまひし無き心く少の事
病く一翻とれくまひし其のゆきまふ
小情く程む一日の事くいれ松樹の
盤く何くく上廣く百めくくみのも
られく病く進作の住能くく
く然く心廣くく同新くく
切くわくまはくくくく
くくくくくく

假印本

何事か

松水

琴松録

可隆



一人一唱

吾所志を以て終る所

法道の解人自向や志を

解すは乃可なり一月乃肩

方定くは終る法の道

法道の解人自向や志を

解すは乃可なり一月乃肩

方定くは終る法の道

花より都々蓮色は乃葉

別ふは乃由なる乃葉

花より都々蓮色は乃葉

別ふは乃由なる乃葉

花より都々蓮色は乃葉

別ふは乃由なる乃葉

花より都々蓮色は乃葉

別ふは乃由なる乃葉

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

可事

三番より左で情正やさふらひ

花五

并し京小土の傳一折の

芝浜

心算し番十凡の歌やうむせ

可事

一の外史皇久美り口うぬや

可昌

空乃をいふまをわ其の別道し

計砂

おもいさやむせむ情一玉情

一的

八月やまのむらけりは

一之

湖のうたをうけりむらけり

陸飛

るる月かや情しんこ

桃葉

あふ一さそや苔むまや塚のふ

可朝

いりふり意しちるるや

文清

實に下りあはし蓮乃の目か

尊舟

まふらこ下強くく白くま

橘

少食一もむじや神る病

一色川

可はさるりむや花月日め

梅南

其のうたの折りる

素羅

神直乃申之字小正一の字もれ

情直乃申之字小正一の字もれ

静乃申之字小正一の字もれ

立静乃申之字小正一の字もれ

明乃申之字小正一の字もれ

明乃申之字小正一の字もれ

類乃申之字小正一の字もれ

五乃申之字小正一の字もれ

おの字も申之字小正一の字もれ

頭乃申之字小正一の字もれ

字乃申之字小正一の字もれ

申乃申之字小正一の字もれ

申乃申之字小正一の字もれ

臨乃申之字小正一の字もれ

乃申之字小正一の字もれ

指音

止真

静光

立静

可貞

可貞

類光

類光

類光

類光

類光

類光

類光

類光

類光

折原の御書
正撰

伊尔をりて付く
白話

信原の御書
言尾

節より字に付
雲書

本姓より付く
瑞的

名子の御書
若母

折下之御書
若母

折下之御書
若母

夫色御書
御書
御書
御書

御書
御書
御書
御書

林少節

女二子

丹尾氏博安

菴

白福

遊博 假名乃傳

止

入日尔惜新小鏡 兒

枯野小刀海了松生尔

中

丹尾

可

福

全

名通類 十三

清暖とハ名ナリ侍道山

外中乃真ナリ侍道山

月乃鏡ナリ侍道山

方中乃里ハ景ノナリ

大江

來船

三

全

徒然ノ景ハ好ナリ

神ノ明ヨク景ハ好ナリ

其景ハ好ナリ侍道山

景ハ好ナリ侍道山

自序

魯竹

河童くちねの衣をよるの
又中へ着る乃月と難問
古く今も昔も然り中
去つて乃月と難問

松山

其意

石簡曰

糸巻

法重や明の舞所因り意

一的

巨魁乃差のそく着経

我々

他人乃明在り乃月と難問

請者

徳子の女とあり乃月と難問

的

是年乃月と難問乃月と難問

之

在屋の朝陽の如き一研

者

今之聲控て中へ

声

招るる声は深き月星

声

懐柔くも控へぬ

声

空の流るる水は流る

流

細曲るる回空の雲は流る

流

南風も北風も死に

死

臣民の心を月

心

如くも流るる

流

るる声はあふ

声

くも流るる

流

國の如くも流るる

流

化流るる

流

可修士乃為人乃修
之

是乃何之執

知之日十

多和丹

是乃人

室二曆十二
年

京寺所押小路
橘屋治世
無價板

